

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第143号（2018年4月）

風に吹かれて（120）

白井啓治

・風に押されて移ろう季節に愉快する

季節というのは風に押されながら移ろっていくものと思っていたが、今年の春はどうなってしまうのだろう。風に押される前に、いきなり初夏の陽気になってしまった。風に押されて移ろい来る季節には愉快を思うのだが、風に押されないで夏が春を押しつけてやって来るのでは不愉快極まらない。

寒さの厳しかった冬がカット・アウトして、春を飛び越して初夏がカット・インして来たものだから、梅をはじめとする春の花々が一斉に咲いてしまった。梅の花、辛夷、木蓮、桜、水仙等々が次々とではなく一斉に咲き出したのである。風情もへったくれもない。何とも不愉快な春になってしまった。

そんな春の所為ではないだろうが、国の政（まこと）の場では、付度・文書改竄の話で右往左往している。何とも低レベルの話で右往左往しているのかと、不愉快さも頂点を越して唯々笑っちゃいますである。

歴史書は、強者の都合で書かれるもの、とはよく言われることであるが、それにしても低い次元

の話である。歴史とは、事実の記録であるが、改竄、捏造の記録も歴史として確りと後世に残しておかねばならないだろう。

一つの組織を経営していくためには、そのリーダーには権力を与えることが必要であるが、その権力とは平等という絶対条件のもとに与えられるものである。平等という絶対条件の元であれば如何な独裁であっても将来を見誤ることはないだろう。ところが人間という動物は、ひとたび権力を手にすると、平等という絶対条件を忘れてしまうようである。揚げ句の果て事実を隠蔽する悪しき付度でも付度なんだから有り難く受け入れよう、ということになるようである。

今年になって、この春の不愉快な陽気を予感するかのように、人生の師と呼ぶべき方々が、せちがらい浮世をさよならした。中でも2月20日に亡くなられた金子兜太さんのさよならは少なからずショックを受けた。

小林一茶、種田山頭火そして金子兜太さんは、小生の詩を書く：と言うよりは灯台のような俳人であった。

・親が死に子が死にそして孫が死ぬ 一茶
これを目にしたとき、何と凄まじい人生訓かと思った。『月だの、花だの言わん。馬から蚤虱、そ

こらを走り回っているガキめらまで、みんな句に詠んでやった（藤沢周平・一茶より）『藤沢周平氏の一茶を読んで、書いて飯を喰う、の開き直りのようなものを覚えた。

・さてどっちへ行かう風がふく

・よい道がよい建物へ 焼場です 山頭火

こうした山頭火の句には、瞬間の瞬間の感性に疑うことを捨てさせてくれた。

そして金子兜太氏の句からは、莫迦野郎を大声で言つてやれ、を学んだ。

4月3日の朝日新聞に、金子兜太氏の最後に詠んだ句が紹介されていた。

・雪晴れに一切が沈黙す

・河より掛け声さすらいの終るその日

この句を見ながら、勝手気紛れに莫迦野郎を声する小生ではあるが、さて吾もいつまでこうして叫んでいられるものかと柄にもなく自分自身を振り返つてしまった。

先日美浦村の市川紀行兄より、陸平をヨイシヨする会の二十周年記念誌「陸平よ はるかに」を送っていただいた。二十年の歩みを紹介された見事な記念誌であった。小生の稚拙な文も掲載いただき感謝である。

当風の会とは、活動の性格は異なるが、長く活動を継続されてきた皆さんの情熱には脱帽である。当会も、先達者の背を見ながら後に続いていきたいと願っている。

当風の会も、来月五月号で、満十二年となる。干支の一回りで、ささやかではあるが特集号を組みたいと思っている。兄達の継続を見習い、小さいなりに確かな継続をと思えばかりである。

当て外れの連続

菅原茂美

私がいかに鈍重であるにしろ、やる事なす事こんなにも、当てが外れるとは思わなかった。ある程度の基礎知識の基に、プランを立て、努力すれば、それなりの成果が得られ、もう少しは増しな結果が得られるはず。そう信じてこれまで生きてきたが、次から次と外れていく。

まずは諸々の能力。典型的な賢兄愚弟の例で、いつも劣等感の少年時代であった。私は学校の成績は悪く、親をハラハラさせる愚か者と見えたらしい。どうしてこんな子がこの家に生まれたのかと母は嘆いていた。しかし父は、しばらく見ていよう…と母を抑えていたようだ。

弁解をさせていただくなら、例えば中学校の理科の授業で、「神経と筋肉」の話などあったとする。すると私は関連して、諸々の事を考え始め、頭の中は別世界を駆け巡っている。五感が外界からいかにして情報を受け取るか、受け取った脳が、いかにして末端筋肉に行動を命令するか、筋肉はどのようにして命令を受け止め、行動を開始するか等、深入りして、先生の話など耳になく、異次元を暴走する。質問などしても、先生から、まともな答えは返ってこない。

さてそのテストがあれば、先生の求める正答は私から返らない。今のようにネットによる検索などあるわけもなし。しばらくは、ゴンボホリ（半夢掘り）で、色々な本を調べ、ある程度の知識で満たされ、授業を遥かに超えた知識がいっぱいに詰まって来る。更にしばらくは神経と筋肉の事で頭がいっぱいで、国語や社会など、他の授業がロクに身につかない。これでは学校の成績が良いはずもない。しかし、こうした習慣が多少偏屈ではある

が、私の基本的学習態度となり現在に繋がり、非常に役立っている。関心の強いものに熱中し、トコトン拘る。

集中力の涵養…ということで、高2の時、数学の先生は私に「囲碁」を教えてくれた。初段の先生は、卒業までに俺に勝てるようになれば、大学合格は間違いなし…と言われた。私は半年くらいで、先生に追い付いた。碁が面白くて、時により受験勉強はそっちのけ。本末転倒だが、自制心は勿論あった。囲碁については、大学に行ってみたら、同じクラスに、初段二人と2段が一人。これ幸いと、4人で4年間、どれほど碁を打ったことやら。4人と言えば当然「麻雀」へも横滑り。実に楽しい学生時代であった。

就職後、囲碁は色々な大会もあり、職場に棋院の5段の先輩もおり、彼の自宅を訪ねたら新聞碁の切り抜きが段ボールでいくつもあった。本棚は碁の本だらけ。5段とはこんなにも勉強するものかと恐れ入った次第。今私はがん治療中でもあり、殆ど囲碁の勉強会には出席できず、ただ囲碁ソフト5段とパソコンで戦っているのみ。勝率40%くらい。

7歳で覚えた将棋は、高校時代、独学でかなり勉強もしたので、今でいう村の文化祭などで、村一流の天狗たちに勝ち、優勝を遂げた。ニキビ面の若造に負けた天狗たちの悔しがること。日本棋院の免状は持っていないが、免状を持つ私の実弟はアマ2段。ほぼ互角に戦えるので、私もその辺かなと思う。社会人になってから、将棋は全く友はなし。以来ほぼ60年間、思考停止。最近、藤井6段の活躍に刺激され、また将棋をやってみたい気持ちはある。

そんなこんなで、漠然としたものではあるが、

囲碁が将棋で一生飯が食えるプロになりたいと一時本気で思ったこともあるが、夢のまた夢。当て外れもいいところ。世間知らずの田舎者には、淡い儚い夢であった。

*

さてこの3月高校卒業した末孫娘が私の中高時代とそっくり。私がいつも話題にする生物学の話に強い関心を持っている。将来はなんと、アフリカで野生動物の保護の仕事をしたいと言いつつ、爺は心配でならぬ。頑固爺に頑固孫娘。

学校の成績は学年で10%以内に入っているが1%とはいかぬ。しかし物凄い読書習慣。買いつける図書券は実に有効活用。これが高校生かと思いつくような博識。ゴンボ掘りで、好きなものは、トコトン追求する。希望の国立大学が、センター試験・一般入試の前に、異色の希望者を選別。野生動物の保護に関し、本当にその事を学びたい決意が固いかどうか、特別に口頭試問と、面前で小論文を書かせ、暮れには全国で、わずか8人の先着合格者となった。昔はそんな制度はなかった。ありふれた入試テストの上位成績者が自動的に合格。大卒の資格が欲しいだけの者が殆ど。それゆえ、本当に学びたい者を合格させる意義は大きいと思う。

さてこの孫娘が、将来科学者か国連の行政マンにでもなれば、爺の望むところ。深入りして、野生のエルザじゃないが、ライオンに噛み殺される羽目になったら、正に爺の大きな外れとなる。しかし楽しんで出世するなど、とんでもない話。命的に、ギリギリの世界に立ち向かう態度にこそ、真の価値がある。

*

次の当て外れは医学・科学の進歩の件。まず医学

面。新聞や科学雑誌には、こんな検査法が開発とか、こんな治療法が近々に実用化見込み…などと報道されるが、市中の一般病院でそれが実用化されるのは、5年も10年もかかる。抗がん剤などものすごく改良され、働きの良くなる、いとも簡単にがんの治療ができるみたいな報道であるが、どっこいそうはいかぬ。記者は新しいニュースを求め、現在進行形でも、すぐ間近かに迫っているように書き立てる。こちらは期待が大きいために、間もなく…と受け止めがち。

私が罹患した2014年の膵臓がんについては、筑波大の発見や手術は、正に適切。ステージ1の早期発見・早期治療で、実に理想的な結果を得た。事後、順調な回復を見た。

しかし続いて16年に発症した「悪性リンパ腫」(血液癌)については、発見に手間取り、治療についても何かの手違いなのか、片目を失明してしまった。私の病型が非常に珍しいタイプで、茨城県で初。日本で21番目の事例というほど珍しいタイプだという。眼球に異常はないのだが、大脳に繋がる視神経が、がんに侵され、脳内なので抗がん剤による治療に手間取り、回復ができなかった。やむなく放射線できい止め、正常な方の視神経を守った。平衡感覚が乱れ、歩行が異常。外来で抗がん剤投与。吐き気などはなかったが、末梢神経のしびれは2年経っても依然として残っている。日本で珍しい病例が、後の医療に何らかの役に立てば私の喜び。

「PS細胞(人工多能性幹細胞)による治療が早期実現すれば、傷んだ細胞・組織が再現できる。既に網膜・心筋細胞のシートなどはできており、動物実験で修復を確認済み。これを人体に応用許可が出れば、それを待つ全国の患者はどれほど福音と

なることや。私の場合も、眼球から脳に映像を送る神経束が犯されたので、PS細胞で、培養した神経線維で置き換えられるなら視力は回復する理屈である。しかしこれも、生まれた年代が少し早すぎた。あと10年ぐらい遅かったなら、その恩恵に預かれたかもしれない。当てにする方が無理なのかもしれないが、病人は藁にもすがる思いである。

2000年の前立腺がんは、非常に悪性のタイプではあったが早期発見・早期治療で極めて経過良好ではあった。しかし全摘して放射線治療までやったのに、18年経った今でもがん細胞はどこかで生きているらしく、マーカー値は動き、治療は続いている。前立腺がんは転移し易いので、軽視するわけにはいかない。

医学の進歩は目覚ましく、かなり楽天的に考えていたが、どっこいそうはいかない。見事に当て外れ。新技術の開発など、その可能性の段階で先発発表するから、庶民は過剰の期待を寄せる。世の中はそんなに甘くはない。

*

次は科学の遅れ。私は30年も前から、「自動車」というネーミングに違和感を抱いていた。人間が運転しているのに「自動」はないだろう。馬車に対し、「馬なしの車」という意味なのであつたらうと思う。しかし21世紀にでもなれば、人が運転しなくとも、行く先をインプットすれば、自動で運んでくれる車が出てくるものと思っていた。それがいまだに実現していない。片目を失明し、運転免許証を返納した私にとって、それが待たれてしょうがない。しかし間もなく、完全自動の本来の「自動車」ができそうなので、当ては外れたが、やれやれと思っている。

私は地方公務員だったので、勤務先を転々移動した。昔は通勤路が間もなく舗装されるらしいとの情報に大いに喜んだものだが、移動した後ですぐ舗装…。バイパスができるらしい…と聞き期待していたら、これも移動後完成等、どういうわけか、ちぐはぐの連続。常に当て外れ。

街中の消防車も入れないような細い道。これもまさか21世紀を迎える頃には区画整理され、車がすれ違えるだけの道幅に改善されているものとの期待していたが、これも見事に期待外れ。

先進国では電線は地下埋却と聞く。狭い道路に電柱は真に車を運転しにくい。何とかならぬものかと常々思っていたが、お祭り第一主義の石岡市では、獅子や山車が通る一部しか実現していない。尤も偉い人たちにとって、選挙のビラを貼る電柱がなくなつては困るのかな？ 犬もそれは困る？ 地下共同溝は電線のほかに、電話線・ガス配管・上下水道など多用途に使われ、誠に結構なものと思われるのに…。

さて次は、なぜ電力は電線なしで、遠隔送電できないのか？ 昔からの私の疑問。電線は山を越え、谷を超え、遠隔地まで電力を送っている。そして高圧の電力をトランスで下げて一般家庭に配線する。電波のようになぜ無線で電力を供給できないのか。もし無線で電力を供給できたら、宇宙で太陽光発電して地上に電力を送ればよい。世の中は想像もできない夢の発想から現実へと進歩してきた。小学生みたいな夢も一考に値すると思うが、科学界の重大な宿題だ。

*

次は道州制の問題。私は長年県庁で地方行政に力を入れてきた。北関東3県とか言うが、隣接県と県境を隔てる理由など何もない。川も道路も繋

がつており、農業生産方式も、何ら変わるものはない。なのに厳然と存在する県境線。

廃藩置県そのままなのか。国からの交付金など分捕り合戦のケチな考え。完全な独立性はなく、何もかにも国の制約に縛られる。江戸幕府く明治政府の流れそのまま。税金のほとんどは国税で、地方独自の税收など知れたもの。国から金を分けてもらうがゆえの従属性など、哀れなものだ。中央に権力集中が強すぎる。農地管理にしても北海道と関東を同じ農地法で縛るなど、ナンセンスそのもの。もつと独自性があつてほしい。21世紀になればこんな基本的問題は当然解決されている筈なのに又も大外れ。

それゆえ我が国は北海道・東北・関東・中部・近畿・中四国・九州沖縄の7道州が手ごろ。それぞれがミニ独立国みたいに財政に独立性を持たせ、連邦制というか地方自治権の拡大が重要で、行政の効率化を図るべきである。国の役目は外交と国防のみで良いはず。但し、ここで浮かんでくるのは、国や地方が、これまでに重ねてきた莫大な「借金」。これをどうするか。

2016年度末、国の借金は1071兆円。

よくもこんなに借金を重ねたものだ。この借金を人口減少する子孫に引き渡すなど、断じてあつてはならない。借金を造ったその時代の人々で自己解決すべきもの。親父は息子に借金を残すな。国の借金は、これを議会で決定した国会議員に重大な責任がある。それゆえ、議員は自分で支払え…とさえ言いたくなる。集票のため、バラまき政策。後継人がおらず、耕作をしない農地を耕地整理して国の補助金を次から次と注ぎ込む無駄遣い。

働けるのに働かない者もいるのに、生活保護費を国民の2%に出している。政府を支援する大企

業の税金をオマケし、辛うじて生きている年金生活者から税金を搾り取る。こんな愚策を演じる国会議員を選出した国民にも大きな責任はあるが、何と愚かな時代に生きている事か？

国の借金を考えたら、まず国会議員の数を真っ先に減らすべき。年度予算など、参議院で通過しなくても衆議院の優先により、衆議院の可決通りに成立する。ならば参議院など不要の長物である。参議院をなくし、衆議院の議員数を減らせば、国の借金減額に大いに役立つ筈。

かなり乱暴なことを並べ立てたが、これくらいの覚悟がなければ、膨大な国の借金は減らない。ドイツのメルケル首相は、ある年度に幾分の余剰金が出た。すると傷んだ国道補修に回せとの国民の大きな声を押さえつけ、国の借金返済に全部回してしまつたという。国の舵を取る者は、薄情と言われようが、これくらいの覚悟が必要であらう。国民の顔色ばかり見て本筋を曲げてはいけない。

人類は特別の存在とみなし「万物の霊長」などと奢り高ぶっている。何が他の動物より優れているのか。言語？ そんなものはどんな動物にだってある。仲間同士しつかり連携し合っている。それとも人類は集団としてルールを決め、しつかり法律の下に社会が統制されている？ 冗談じゃない。ドイツの諺に「法律とはクモの巣のようなもの。ハエは捉えられるが、カブトムシは突き破つて通り過ぎる」。そこらここらにカブトムシはいくらでもいる。それが嵩じればたちまち世界戦争に発展。しかし次の大戦は敵弾が飛んでくるのではなく、人工衛星を破壊し、すべての電磁機能がマヒするサイバー攻撃。通信・ライフライン・経済の動脈が切断。中国は、2007年に人工衛星破壊実験を既に試行している。北朝鮮とアメリカの

戦争などチャチなもの。本格的米中・米ソ戦争を私は恐れる。

日本の3大ザル法①政治資金規正法②売春禁止法③建築基準法。いずれを見ても、底抜けのザル法ばかり。何一つ厳格なものはない。文明らしきものが発生してほぼ1万年。いい加減人間らしい神聖な社会が築かれていてもよさそうなものなのに、一つも進歩していない。シリアでは政府軍が国民に向かって爆撃し、毒ガスを使っている。お隣の国では、国民300万人を餓死させてもミサイル増産に励んでいる。大脳発達で、いくら文明が進化しようが、他の動物と何ら変わらぬ本能丸出しの蛮行が続いている。21世紀にでもなれば当然世界は平和に満ちたバラ色の世の中になっている筈が全て当て外れ。

最後は卑近な例だが、預金利子が殆どゼロ。退職金の利子と、年金で晩年はなんとか暮らせる…と目論んでいたら、とんでもない当て外れ。

認知症が進み、要介護が激しくなったら、間もなく、桁外れの出費が予想される。よい方に当てが外れたのは、ファミリーに恵まれた事。みんなよくやってきている。これで十分。

地域に眠る埋もれた歴史(37)

木村進

石岡に残されている道標 3 つ
(2) 右あたご、左ねあたり

石岡の陣屋門が石岡小学校校庭にまだおかれていた時のことです。ここにいつのまにか一つの追分石が陣屋門のすぐ脇に置かれていました。しかしこれには何も説明がありません。



この陣屋門も市民会館ができた時に移設したものですのでどちらも元の位置とは違う場所に置かれたこととなります。陣屋門は昔の場所近くに戻されましたがこちらはそのままです。もともと陣屋門も全く似て非なる新しいものを作ってしまった歴史の街としては残念に思います。

この追分道標には「右 かさま 阿たご 道」
「左 根あた里」横には「香丸町 鈴木。。」
などと書かれていました。あまり良く判読できません。

さて、ではこの追分が昔、置かれていた場所かというと、七谷家具さんのあるところの分かれ道だそうです。確かに右は笠間方面です。左の道は石岡二高の方に行く道ですが、根当（ねあたり）方面につながっています。その先には園部く部原く瓦会く（宇都宮街道に合流？）だったのでしょうか。
また、昔（江戸時代）の手書きの地図が残されています。

ますが、これによると千手院の大きな寺院が手前にあり、左側に国分寺がありました。この笠間への街道も千手院をまわくようにつながっていたようです。

今は国分寺の境内に千手院の藁ぶき屋根の山門だけが置かれているのみで、昔の面影もありませんが、国分寺は千手院の末寺のような位置づけだったようです。

この旧千手院の山門の手前を右に曲がって泉町から杉並へ向かうのが旧水戸街道です。

この水戸街道はこの先山王川を渡り、その先には一里塚が両側にそびえ、その先には日光と同じような杉並木の街道が続いていました。

さて地図では、千手院の裏に大きな「薬師」様と木々の茂みが見えます。またこの図では左手手前に「国分寺」と寺が書かれていますが、これは現在ありません。

昔の常陸国分寺は、この地図の「薬師」とあるところですが、この千手院も含めた領域になっていたと思われる。この位置関係を、現在の地図に書き加えてみました。そうすると、昔の道がおぼろげながら見えてくるではありませんか。（ここには記入した図面は省略します）

この道標の位置は、この推測ではNTTの建物の少し手前から右（東）へ曲がる道があり、この道（今の旧国道355号の1本東側の道）が昔の笠間方面に行く街道でした。そのため、この道標があった場所はこの曲がり角と推測されます。

この右「阿たご」は十三天狗の岩間山（現愛宕山）愛宕神社のことを指すものと思いますが、この道標が置かれていたと思われる場所の近くにもやはり「愛宕神社」があったことが昔の地図にあります。こちらは総社宮に合祀されたそうです。やはり

り愛宕神社は火防の神様をまつっていたものでしょう。どうやら、この旧道の分かれ道にあったものを、今の分かれ道のところへでも移動し、さらにまた関係のない「ふるさと歴史館」の近くに移動したのと思われ。やはりこのような道しるべはあるべき場所に無ければ意味がないと思われ。

（3）石岡町道路元標

石岡市街の中町の筑波銀行（旧関東つくば銀行、その前は関東銀行）の入口にある「石岡町道路元標」という石の道標を見たことがあるでしょうか。

銀行入口の石畳の一部に置かれているこの石標はこの部分だけまわりを敷き石で囲っています。気をつけて見ていないと目立たないので多くの方は気がつかないで通り過ぎてしまっていると思います。しかし、各地の道路元標を探して見に来る方もおられるようです。



これが置かれたのは記録が残っていないようですが、明治6年に各府県ごとに「里程元標」を設けるように政府より指示され、また大正8～9年に旧道路法では各市町村に一個ずつ道路元標を設置することとされたといえます。

そうすると、この石岡町の道路元標はこの大正8～9年の道交法により設置されたものと考ええるのが妥当だと思われます。

設置場所は府県知事が指定することとされており、道路元標のある場所を起終点としていました。しかし、道路法では道路元標は道路の附属物とされているだけで、道路元標の設置義務がなく、いつのまにか取り壊されたり工事などでなくなってしまう道路元標も多いそうです。

茨石商事刊のワクワク通信「ワクワクふるさと紀行」をまとめた「いしおか100物語」に、昭和9年10月18日の読売新聞の記事が紹介されています。

「近くアスファルトの舗装工事が成り、県下一模範道路の折り紙をつけられる石岡町に、これは又何としたことか、町の道路元標が郵便局の空地に数年間投げ捨てられたまま子供等のオモチャになっている。もしこの石が物言うなら、模範道路が聞いてあきれ、まずこのおれをもとの場所へ立ててから自慢をしてほしい、と云うに相違ない」そして、この元標は元の位置に戻されて今も残されているのです。

この場所は江戸時代の水戸街道沿いで、府中本陣矢口家の近くにあり、昭和8年まで「石岡警察署」があり、そのあとを昭和46年まで「石岡郵便局」があり、その後「関東銀行」が移ってきて現在は「筑波銀行」となっています。

100物語では明治の初期の建設ではないかとさ

れています。全国の元標の記録を見ると大正8～9年の設置でしょう。

この道路元標のデータベースを構築しようとしている人もおられるので、石岡ももっと情報を発信していただきたいと思います。

さて、当時の市町村に1個ずつ設置されたとするなら、現在の石岡市には幾つ設置されたのでしょうか？

「石岡町」「關川村」「三村」「高濱村」「柿岡町」「園部村」「瓦會村」「林村」「戀瀬村」「葦穂村」「小幡村」「小櫻村」の12か所に設置されたことになりそうです。恐らくまだいくつか残されていると思いますが、柿岡には残されており、柿岡の中心地「八坂神社前」の角に置かれています。他にもまだあるでしょうね。

また近くの市町村では土浦町の元標が亀城公園の前に残されているそうです。どこも、その町の起点となるとここに設置されたようです。村のものなどは、多くはその時の村役場の前などに設置されたようです。

さて、もう少し紹介しておきましょう。

筑波町の道路元標が「筑波山神社の御神橋の前」にあります。でも、道路の起点(基準)となる場所が、山の上(中腹)になっているとは。さすが筑波ですね。

それと北条町道路元標が大きな石の道しるべがある「つくば道」の入口にあります。

また町歩きなどをしていると時々目にします。これらも市町村が合併したりして町や村の名前が消えてしまってもその昔の道路元標を残しておくというのも非常に有意義なことだと思います。

「歴史」は、その時々々の政権などで変えられ、利用されてきましたが、このような小さな事柄も残されていなければ事実にとどりがくことが難しくなり、行く末が危うくなります。

昔学んだ「伝統芸能の話」から

軍国主義復活と伝統芸能

木下明男

5 日本伝統芸能の進む道

日本最初の国立音楽学校は、明治20年(1887年)に東京・上野にできた東京音楽学校で、最初の校長は伊沢修二(1851～1917)です。伊沢はその他に、文部省の音楽取調係長・編集局長・帝国教育会長・台湾総督府学務部長等を兼任または歴任して、明治政府の軍国主義の文教政策を押し進めた中心官僚の一人です。東京音楽学校ができる前、伊沢は文部省の音楽取調係として、ヨーロッパ、アメリカを廻り音楽事情を調査した。その結果、日本の伝統音楽は全て国立音楽学校で教える値打ちがないものとして、ドイツ音楽を中心にヨーロッパ音楽だけを教える、植民地以外には世界でも類の少ない方針を立て実行した。明らかに、此処には極端な外国崇拜がハッキリ現れている。ところが伊沢は、同時に極端な国粹主義者でもあった。「教育勅語」の出た、その日にそれを広めるため、彼が創立した「国家教育社」の方針が最もよくそれを示している。明治23年(1890年)6月1日、浅草鷗遊館で発表した主旨の中で次のように言っている。

「……そもそも我が大日本帝国の国家の他の国家に異なる所は奈辺に於いて存するか。実に一

国の唯我たり至尊たり神髓たる元首において大いに異なる所あること明けし。吾が国は宝祚の隆んなること天壤と共に窮り無かるべき万世一系の天皇陛下が治しめす国にして世界無比のる所は奈辺に於いて存するか。実に一国の唯我たり至尊たり神髓たる元首において大いに異なる所あること明けし。吾が国は宝祚の隆んなること天壤と共に窮り無かるべき万世一系の天皇陛下が治しめす国にして世界無比の帝室を戴けるものなり。我が君臣の關係は申すも恐れ多きことながら恰も父子の如きは史乘に明らかなるの事実なり。是れこの事たる他国人の常に欽羨して措かざるも到底これに模倣することさえ為す能わざる所のものならざるや斯くの如き元首こそ真に万世不變唯一至尊の要素として我が国家を成立せしむるものとは稱うべけれ。固より他国の元首と日を同じくして語るべきものにはあらざるなり。是れ我が社の要領中忠君愛国の元気を養成煥発すべき事と云う条を第一項に掲げたる所以なり。……

こういう方針で、音楽の面では、「紀元節」・「皇御国」・「天長節」等の多くの軍国主義の唱歌を作曲し、また、各地で広く行われていた「かぞえうた」を、

「一つとや

ひとと生まれて忠孝を

かきては皇国の人でなし

二つとや

ふたおや兄弟うちそろい

たのしく暮らすも君の恩

……

と文句を作り替え、無理に小学生に歌わせると言う事までやった。極端な外国崇拜と極端な国粹主義、対立する二つを一つの体で統一するのは、決

して簡単な事ではないが、どうしてこんな不自然なことがやられたか、それは近代・現代の日本音楽は極度に輕蔑し乍ら、古代の日本音楽は狂信的に崇拜すると言う、奇妙な復古主義の態度を取ったからです。つまり、近代・現代の日本音楽の否定と言う一致点で、外国崇拜と国粹主義の矛盾を統一していた。天皇制の復古主義が文化に与えた害毒が此処に典型的に表れているが、伊沢はそれを次のような形で実践された。明治16年(1883年)伊沢は「俗曲改良の事」と言う報告を文部省に出しているが、その「俗曲」の中には、各地の民謡、はやり歌、琴唄・地唄・長唄・端唄・小唄等の歌いもの、義太夫・常磐津・清元・新内、その他の語り物、それら一切が含まれている。当時、大衆の間で行われていた全ての日本音楽を「俗曲」と呼んで、雅楽や能楽と対立させている。そしてその「俗曲」は、

「……俗曲の淫奔猥褻なるは、風教の酖毒をなす、これその一つなり。俗曲の旋律淫風をきかむるは、士人の趣味を淫佚にみちびき、ために雅正善良なる音楽の振興を妨害する、これその二なり。俗曲の淫邪なるは、誘惑の途をひらき、徳教の涵養を妨害する、これその三なり。外交日新に際し、彼此の文物相融通するの今日にありて、なお、かくの如き音曲のさかんにおこなわるるは、国家の体面を毀損する、その四なり。しかるに、俗曲は、今日、民間流行の甚だしきものにして、下民の風俗はほとんどここに根柢するの勢いあり……」

と言っているが「風教」とか「雅教善良」とか「徳教の涵養」とかいふのは、全て、忠君・愛国などの軍国主義教育主にしたもので、「下民」の勤労者の大衆音楽がその役に立たないと言う事です。

「……あるいはいう、俗曲はあげてこれを禁断すべし。俗曲は下等社会の薬となし、中人以上に用うべからず。あるいはいう、旧来の俗曲は、一時にこれを廢絶して、新曲を撰定すべし云々と。これらの諸説おのおの一理なきにあらざれども、また、みないうべくしておこなうべからざるの説なり。たといこれを嚴

禁せんとするも、かくのご

とく民心に蟠屈したるものはすでに容易に抜くべからざるの根幹をなせり。加うるに、たとい現存のものを禁ずるとも、これにかうる良薬なき以上は、またその害を他に發出せんことうたがいなし。これを下民の薬として、中人以上に用いざらしめんとするとも、この楽曲のあらんかぎり、いきおいその害を上流に及ぼすことなきあたわず。……」

しかし、伊沢は、古代の音楽とりわけ、貴族ぐげの雅楽に対しては、絶対崇拜の態度を取り、その雅楽で「下民」の音楽を改良し、「上流」への害を塞ぎ止めようとした。此処には社会發展を基礎として音楽も發展するものだという歴史の法則を否定する反動的態度、極端に勤労者を輕蔑する反人民的態度、その二つの思想がハッキリ表れている。そうして取り上げられたものが箏曲(琴の曲)です。

「……俗曲中、その弊害の至少なるは箏曲とす。箏曲中においても、その作いよいよ古きものは、その弊害少なきを見る。これをもって、従来着手せんとするところの改良は、箏曲をもって第一着手となせり。これ、すなわち、箏曲は上流の社会におこなわるるのもっとも広くして、その弊害のもっとも少なきをもって、その改良の一日もゆうよすべからずして、その成果を検するのもつ

とも容易なるをもつてなり。けれど、箏曲諸曲を審察するに、箏曲中、組曲は、もつとも古代にぞくし、やや純良なるもののごとし。ゆえに、これらはさらに考うる所あり。しばらくこれをおき、第二步にゆずり、その普通一般のものをとりて、これを改良するを第一歩とす。……」

復古主義は、こうして、実践され、箏曲の内容も形式も大きく変えられた。多くの歌から恋愛等の文句は、「淫奔猥褻なもの」として、取り去られ、皇室や軍国主義を称える「雅正善良なるもの」にかられた。白井権八と小紫の恋愛の「江戸むらさき」は風景だけの「落梅」に、徳川幕府の乱脈を風刺した英一蝶（はなぶさいちちょう）の絵から出たという「朝妻舟」は嵐山の舟遊びの「三つの曲」に、「きせん」は「小野の山」に、「千箱の玉草」は「関の清水」と言う様に、題も内容もすっかり変えられ、音楽も雅楽を基に大きく改められた。その結果、それらの作品が益々大衆と縁の遠いものになっただけでなく、流派によって、旧作を教えたり、新作を教えたり、解決のつかない混乱を生んだ。同時に、「やまと心」・「護国歌」・「御国のほまれ」・「国のもと」・「紀元節」・「日本軍人の曲」・「兵士の母」・「日鮮合併の曲」・「日本海陸の曲」・「がいせんらっぱ」など、箏曲による無数の軍歌が作られた。「御国のほまれ」は、「カンカン調子」の調弦法を初めて使ったというので有名だが、歌は次のようです。

「神の代の、光かわらで、日の本の、げにあり
がたき大君の、むかしにかえるまつりごと、
ひなも都もあきらかに、おさまる御代の秋津
国、水と魚との君と臣、この国かけて、まじ
わりも、なお年ごとにひらけゆく、民ゆたかなる、
とよどしに、神の恵もあらわれて、国

のみいつはつきせじな、国の光もたえせじな。」
「護国歌」はこうです。

「すめら御国のなりたちを、心をこめて、たれも見よ、文武百官、農や商、とおつ御親のむかしより、おのがさまま学びえし、道にひたすら身をゆだね、その聖業はかわれども、むこう心はひとしじに、強兵富国をめあてとし、一命すてはたらくも、ひとりの君をまもるため、ひとつのくにをたもつため。」

こんな幼稚な歌で最も「高尚な」音楽を作ろうとした当時の指導者たちの低級さを此れ程よく示している例はないが、これらの歌が永く歌い続けられて軍国主義の根を養ってきた事実を、今改めて反省しなければならぬ。もしも80年前、国立音楽学校が出来た時、ヨーロッパ音楽と一緒に日本の伝統音楽が正式の課題に取り入れられていたら、こんな酷い事にはならなかった。当然、進んだヨーロッパ音楽の光が日本音楽の遅れた要素に当たり、何を捨て何を取り入れなければならぬかと言う、正しい方針が立てられていたでしょう。

今の日本には、ヨーロッパ音楽の演奏では大抵だが、日本の伝統音楽は全く演奏もできなければ歌もしないと言う、奇妙な音楽家がたくさんいる。一方、外国音楽の知識や理論は全く持っていない、伝統音楽の専門家もたくさんいます。80年間入れてきた西洋音楽も、日本音楽を高めるためには、極めて僅かの役にしか立っていないかった。

中国侵略戦争が大きく進んだ11年（1936年）から、やっと、能楽や箏曲や長唄など、一部の伝統芸能が昭和東京音楽学校の正式課題に取り入れられたが、終戦後東京音楽学校が東京美術学校と合併して東京芸術大学に昇格することが決まり、小宮豊隆が校長になると、校長自身が伝統芸能

の授業を止めようとしたので、大反対を受け校長が辞職する騒ぎが起こった。

外国崇拜と国粹主義の害毒は、この様に解決のつかないまま、長く残り敗戦による日本の社会の変化に伴い、大きく形を変えバランスを崩しながら、今も伝統芸能の発展を妨げる根本の原因となっているだけでなく、再び軍国主義に利用されています。日本がアメリカに従属したのを利用して、外国の退廃的文化を流し込み、日本人の自覚を抑える最大の武器に使っている、外国崇拜の害毒は分り易い。国粹主義は、伝統芸能の封建的な「家元制度」の組織に深くその害毒の根を残していたために、同じように軍国主義復活に利用されている。日本の伝統芸能は、非常に多くの種目に分かれたまま、更に非常に多くの流派に分かれておりますが、其々の流派には必ず、一番上に「家元」があり、その下に「名とり」の師匠（家元の名まえの一字を貰っている師匠）がいて、その下に無数の門弟がいるという仕組みになっている。各派・各流に渡る「家元制度」の組織は広大なものです。

謡曲の「うたい」の人口が200万を越したと言われたのは、かなり前です。これは、「うたい本」の出版部数に基づいたもので、正確な数字です。あの「うたい本」は、「うたい」を習うものしか買いませんが、買った後何十回も何百回も読んで暗記させられ、其処はこういう内容だから、こう理解してこう表現しなければならぬと、師匠に叩き込まれます。ほかの種目もみな同じです。「名とり」の師匠が、琴（箏曲）が五万人、長唄は千四百人、端唄は四千人、踊りの花柳流が一万二千人、藤間流が六千人等と言われていますが、この下に、其々数十万・数百万の門弟が組織され

ている。それが今、文部省の直接の指導で「期待される人間像」を基礎に、思想的統一されようとしている。帝国主義者は、従属国に残っている封建的要素を最大限に利用すると言われるが米・日反動は、これまで縦の組織だった伝統芸能の「家元制度」を、今度は横に思想的に統一して、軍国主義復活の基礎にしようとしている。だから、生け花・茶の湯・書道・和歌・俳句その他に残っている封建的な組織と共に、保守政党の重要な選挙基礎になっている。

元々全ての伝統芸能は、非常に古い時代から、民族芸能に発達する共通の要素を持ちながら、各地で別々に生まれ、育ち続いてきて、資本主義社会に入つて、初めて「民族芸能」に統一される本質を持ったものです。それは、「民族」の成立に文化の統一を要求する、歴史の法則によるもので、従つて、全ての伝統芸能の中には必ず「民族芸能」に発展できる要素と、発展できない要素と、両方が含まれています。それを正しく見分け、解決して、伝統芸能の正当な発展を図る事が、資本主義社会で文化の指導を担当した資本家階級の任務で、ヨーロッパではそういう指導で、今のような文化が発達したものです。しかし、明治以後も永く、封建的要素と資本主義的要素の矛盾を解決できず、絶対的天皇制を成立させて、ひたすら軍国主義の道を歩いた、日本の資本家階級には、そういう能力がなく、封建的要素からは極端な国粹主義を、資本的要素からは極端な外国崇拜を引き出して、両極端に分化・対立させたまま、遂に解決できなかった。日本文化を発達させるのに、一方は伝統文化を守りさえすれば良いと考え、一方はヨーロッパ文化を入れさえすれば良いと考えた。更に、終戦後は、日本の資本家階級は、アメリカ

帝国主義の方針に従い、伝統的な外国崇拜を利用して、退廃的な植民地主義文化を流し込み、日本人の自覚を眠り込ませようとする、完全な売国主義者の態度を取っている。日本伝統芸能の今の危機はこうして生まれ、軍国主義復活への利用が益々深めている。

伝統芸能は、資本主義社会で、資本家階級の指導の下に、資本主義的伝統芸能に発達し、更に社会主義社会で、労働者階級の指導の下に、社会主義的民族芸能の方向に進む本質を持ったものです。伝統芸能を民族芸能に統一・発展させると言う、資本家階級の果しえなかった民族的任務は、日本では当然労働者階級手に受け継がざるを得ない。うたごえ・労音・わらび座・民族芸能を守る会・ふきの会その他、伝統芸能の問題と真剣に取り組む多くの民主団体が生まれているのは、世界的にも例が少ないが、それはこういう日本の特殊事情に基づくもの。かなり前から、西洋音楽に対しては、伝統音楽に対しても、勤労者の間から言葉が判らないと言う不満が一斉に出ている。音楽が狭各地で伝統音楽を学び始めた事と結びついて、勤労者が新しく音楽に参加し、日本音楽を高めるために新しい積極性を示している実例です。これまでも、西洋音楽をやる多くの音楽家たちは、ドイツ語やイタリア語の発声の研究・訓練はやつても、肝心の日本語の研究・訓練はやつたことがない。日本語の特色・組み立て・アクセントなどを無視して、ヨーロッパ語の法則で作曲したり歌ったりしていたので、日本語の歌でなくなり、誰にも判らないものになっていた。伝統音楽の音楽家たちも、また、日本語の本格的な研究・訓練はやらす、形式的な伝統を抜くだけだったので、元は守っていた法則まで崩して、内容も形式も時代に

合わなくなり、やはり大多数の日本人には判らないものになった。其の隙間を縫って退廃的な流行歌が蔓延っていた。

今の日本音楽の持つ、本質的な欠点に初めて厳しい批判を加えたものが、労働者を中心とする勤労者と言う事は、重要な意義を持つている。音楽（芸能・文化）を愛する労働者の体の底には、音楽（芸能・文化）の発展を愛する熱情が籠っている。

このように、伝統音楽の発展に対する労働者階級の発言が次第に強まり、伝統芸能の将来に新しい光を投げている。

伝統芸能は、

一、保存

二、改造

三、創造

の三つの段階を統一して、初めて発展できるものです。美術や文学は、博物館だけでも、ある程度保存できますが、伝統芸能は、見る人と聞く人と演奏者があつて、初めて成り立つので、見る人や聞く人や演奏者がいなくなれば、滅びてしまふ。誰にも判らない、誰も感動しない、そういう作品誰も演奏しなくなる。死んだ譜や記録が残るだけです。そこで、保存の値打ちあるものとないうものをハッキリ見分け、値打ちのあるものの何処を伸ばし、何処を除けば、一層良く判り、一層感動を深められるようになるか、絶えず研究し、改造しなければ、保存できません。改造しなければ保存はできず、保存に改造が含まれている。改造は創造を加えなければできないから、同じように、改造には創造が含まれている。伝統芸能の保存・改造・創造は、このように、切り離せなく繋がったもので、それを統一して初めて、真の創造が生まれ、真の発展がある。

一、心から伝統芸能を愛し、その発展を愛する
真の愛国主義。

二、全世界の勤労者の経験から学び、その連帯
の上に、伝統芸能の正しい発展を計ろうと
する、真の国際主義。

この二つを正しく統一できる、ただ一つの階級
である、労働者階級の指し示す方向に向かって、
初めて日本の伝統芸能が進み始めている。そして、
そのために

一 政治的には、米・日反動の軍国主義と戦い、
二 思想的には、「期待される人間像」に代表さ
れる反動的・反人民的・反民族的な西田哲
学と戦い、

三 組織的には、封建的な「家元制度」の害と
戦い、反民主的な組織を量・質共に伸ばす。
こう言う歴史的な任務が芸能を愛する全ての勤労
者の肩に掛かっている。 おわり

あの歌は何処へ

伊東弓子

母は、よく歌をうたっていた。何時覚えたのか
も記憶にないが、時となく私の体から沢山の歌が
出て来る。三月から四月にかけては、特に「惜別
の歌」を口遊むことが多い。それもここ何年か年
齢を重ねるにつれて回数が増えたように思う。

中学校卒業の時の友との別れは辛かった。遠く
へ就職する友、知らない土地へ引っ越ししていく
家族、疎開していた友が都会へ戻っていったりと、
もう二度と会えないかもしれない悲しみの中で、
この歌は私の心の表現としてはまだ唱っていないか
った。

高校の時の卒業時には、庭に出て、体育館で、
校庭から菜の花の向こうに見える筑波の山を仰ぎ
ながら広範囲に別れていく友、お互いの希望を語
りながら唱った。この歌の気持ちと自分の現実が
分かり出した頃だったのか。その五ヶ月後のある
人との別れは今迄の人や友との別れとは違った。
なにか切ない別れだった。五年間は、将来へ繋ぐ
仕事の基礎づくり、それぞれの道を頑張ろうとい
う別れだった。五年後の東京オリンピックには合
うことを約束したが、帰り道は淋しさと悲しさに
包まれ、泣きながらこの歌をうたっていた。
“遠きわかれに 絶えかねて
この高殿に のぼるかな
……
……
……”

あの頃、私も若さに満ち溢れていた頃だ。あの
人が、そう思ったかどうかは分からないが、二番
の歌詞を口遊んでいた。

“君が爽けき 眼のいろも

君 紅の 唇も

君が緑の 黒髪も

またいつか見ん この別れ”

その後、人との別れは沢山あった。恩師が転
任していった。同級生が結婚して遠くへ行った。
先輩の死、伯父、叔母との別れ、父母、姑のあの
世への旅立ち、特に若い人、幼い子との別れ、死
は辛かった。仕事をし家庭の切り盛りに明け暮れ
ている中では、自分の風貌などあまり気にしない
できた別れだった。

定年を過ぎて、地域での生活、活動、付き合い
への参加の中で、衣服や化粧などの話題が多くな
ってきたのに気づいた。今迄そういう事には無頓
着できたので、改めて自分を振り返る切っ掛けに

はなった。あの歌を涙を流して唱った頃の私とは
違ってきているを、認めざるを得なかった。

二重瞼の目はいつも輝いているね、と言われた
日の懐かしいこと。夫は渥美清、私は大空まゆみ
よ、とお互いに笑った日もあった。今、あれもこ
れも生命の灯が消えない中に欲深く行動している
その目つきはどうだろう。人を疑う濁った色にな
っていないだろうか。化粧をしなかった者が紅を
さすなどもしなかった。今は出かける時、淡い色
の口紅をさす。一瞬輝きを放つような私。1キロ
も自転車走れば消えてしまうだろう。それより
口から出ていく言葉に気を付けねばと思うことが
あった。でも言わねばならないことは言うことに
する。個人を攻撃するつもりはないから。

母に似れば白髪になるだろうと思っていたら、
髪際から白くなり、白い額縁のようで恥ずかしか
った。白髪は七十才になる迄は染めて、と思っ
ていたが欲が出て今尚染めている。父に似たのか薄
くもなつて悲しい。一番のショックだった。黒髪
は生えてこないだろう。

「もうお合いしても、あの頃の姿とは随分変わ
ってしまいましたよ」

一部分だけではなく体全体が変わっているのだ
と認めなければならぬことが沢山ある。自慢だ
った白い歯並びもガタがきて、言葉の発声にも影
響しているかも知れない。あんたの足は奇麗でい
いね、と母が羨ましがっていたが、今は私の足に
も母と同じ静脈瘤が出来て見づらが悪。色白と
はいかなくても若い時の肌は美しかった。今は顔
にはしわが、腕には小波のように細かいしわがよ
っている。父のお尻は力を入れてするので、若い
私は恥ずかしく聞いたが、母のことを苦笑いしな
がら、上品だった長屋先生も今じゃお尻を落とし

て歩いているよ、と言っていたのもつい二三日前のようだ。今は私がそうになっている。

あの頃の姿は、何処へ行ってしまったのだろうか、と嘆いていても仕様が無いが、これが自然、この姿が現実なのだ、と必死に言い聞かせる私。私の体はみんな借物でお世話になっているのよ。目にメガネ、歯は入歯、足を助けて手押し車、と母は良く言っていた。昨日、友が発破をかけてくれた。

「当り前よ。目が悪くなれば眼鏡、耳が悪くなれば補聴器、足が悪くなれば杖、髪が薄くなればカツラ。あんたは足が丈夫でしょう。自転車に乗れるでしょう。くよくよしないでよ。私、七十才過ぎて免許取ったのよ。今日乗ってきたのよ」と元氣な姿を見せてくれたのは嬉しかった。その友も辛いことがあったばかりだったのに。

あの若さは、生きてきた力の元になったのだ。あの歌も私が生きてきた体の為に注いでくれた栄養の一つだ。その他に数々の歌が、常に私の体の中から湧いてきて、豊かな心を育ててくれた。私の人生を支えてくれたと思っている。

昭和三年、女学校三年生だった母は素晴らしい音楽の先生に受けもたれたと聞いた。クラシックから童謡、民謡、その他沢山の歌を教えてくれたそうだ。学校中に三年三組の歌声が響いていたという。先生の考え方は、「これからお母さんになるみなさんは沢山の歌を覚えて我が子に唱って聞かせてほしい」という話を常にしてくれたそうだ。時間の許される限り、みんなで唄ったそうだ。その先生の気持ちをついで母は嬉しいにつけ、悲しいにつけ、季節の歌などを数知れぬ程唱ってくれた。私たち姉弟もそういう歌に包まれて育ってきた。お彼岸に父母のお墓の前で母に話した。

「私もこんなに大きな年齢になったんだから、

あの歌はどこかへ行ってしまったね」

すると母は、

「そうね、元気で暮らせる毎日が有難いことでしょう」

そして、二人で唄ったのは、

「別れといえど 昔より

この人の世の 常ならむ

： ： ：

お線香の煙立つ中に、傾いた陽が周囲を染めていた。私はその方に向かって自転車を走らせて唱っていた。

「命短し 恋せよ婆さん

赤き唇 色あせても

： ： ： 「と。

市指定文化財（二）

兼平智恵子

去る一月三十一日（木）～四月三十日（月）まで、石岡市立ふるさと歴史館内企画展に於いて、石岡の昔ばなしの世界「むかしむかしの物語」が開催されています。

すでに二か月が過ぎましたが、二月に行われた「いしおか雛巡り」と重なって市内、県内外の多数の皆さんにご覧頂いて居ります。

石岡市内、村上地区に伝わる「子は清水」、同じく市内、三村地区に伝わる「八幡太郎と鞍かけの松」、市内、国府五丁目に伝わる「護身地藏のはなし」、市内、小幡地区に伝わる「十三塚のいわれ」、市内龍明地区（旧猪内）に伝わる「長楽寺の天狗」、と五話になります。

どうぞお子さん、お孫さんとの会話の中に、語り継いでいつて頂けたらと思います。勿論お子さん、お孫さんとご一緒のご来館もお待ちしております。民話を通してふるさとを知り、郷土愛を育くむことを応援しております。

石岡市ふるさと歴史館は、石岡市立石岡小学校敷地内にあり、月曜日休館、十時～十六時半開館、入場無料です。

本題の今月の市指定文化財、「都々一坊扇歌堂」のご紹介に入ります。

〇都々一坊扇歌堂 有形（建造物）

指定 昭五三・九・十一

扇歌堂につきましては、当会報三十七号に続きまして、第二回目のご案内となります。

扇歌堂は、石岡市府中五丁目一番、国指定特別史跡「常陸国分僧寺跡」の境内にあります。

都々逸（庶民が暮らしの中で、心意気や花鳥風月、恋心などをサラリと七・七・七・五の四句で詠いあげる）は江戸時代の後期に名古屋で生まれ、江戸に渡って俗謡として完成。特に庶民の信仰と遊樂の町・浅草を中心に都々逸は大流行し、その元祖として一世を風靡したのが都々一坊扇歌でした。

都々逸を顕彰する碑は、全国に四つあり、一つは浅草の都々逸塚であり、二つ目は名古屋市熱田区伝馬町に立つ「都々逸発祥之地」の碑。三つ目は、常陸太田市の磯部にある「都々逸坊扇歌」の碑で、四つ目が石岡市の国分寺境内にある市指定文化財「都々一坊扇歌堂」と扇歌作の歌碑です。

又、石岡では平成二十六年十一月に俚謡愛好家の皆さんによって、常陸風土記の丘に扇歌作の歌碑が立てられました。

尚常陸太田市と石岡市の場合、都々逸そのもの

のでなく、都々一坊扇歌を顕彰するものです。

扇歌堂は民衆の心の唄である都々逸の創始者、初代都々一坊扇歌の霊を祀り永く顕彰する為、昭和六年市内の有志が全国の都々一愛好者より浄財を集め、

昭和八年四月八日完成、盛大に入仏式が行われました。

堂内には当時、笠間市在住の横山一雅氏作の木像が安置されています。また馬堀法眼喜孝画伯の画かれた大肖像画が寄贈されました。

昭和二十六年には、市観光協会主催で盛大な百年祭が行われ、胴の直径が一間もある大三味線が馬車

に乗せられ市中を行進、「こんな大(だけ)い三味線は一体なんで弾くのだろう」との問いに「馬車で曳く」と答えたとの逸話があるそうです。

百年祭の記念スタンプ国分寺内参詣記念

常陸石岡 ドム一どころ

うたの先祖さんの ねむる ところ

も用意され、扇歌堂の会場は大賑わいの様子が写真集 いしおか昭和の肖像 で見ることが出来ます。

又、昭和五十六年十月二十七日、扇歌 百三十年忌に当たり、都々一坊扇歌百三十年祭実行委員会が、扇歌堂の東側に顕彰の歌碑を建立しました。

たとと売れてもうれない日でも

同じ機嫌の風車 扇歌

平成二十六年十一月、常陸風土記の丘に建立された歌碑は辞世の句。

ここで高橋武子著「都々一坊扇歌の生涯」より、抜粋させて頂きます。

その時、どこまでも静かに横たわる扇歌を一晚中見守っていた桃経は、安らかに閉じられた弟の

目尻に光る、小さな涙に気がついた。涙は少しずつ大きくなって、やがて、すっと頬を伝って落ちていく。

弟の唇がかすかに動いた。

今日の旅 花か紅葉か 知らない けれど

風に 吹かれて ゆく わい な……

ほとんど声にならない声であったが、桃経は、確かに、そう聴いた。

嘉永五年(一八五三)十月二十九日の夕暮れ、扇歌は、変転極まりない四十八歳の生涯を閉じた。

扇歌の棺の中には愛用の三味線も納められて、姉の嫁ぎ先の酒井家の菩台寺千手院(現石岡市国分寺)に埋葬された。戒名、都々一坊賢叟清信士。

安政四年(一八五七)桃経は病床で、「墓石は、どんなに小さくてもよいですから、弟扇歌の戒名も一緒に刻んで下さい」と家族の者に遺言した。居候であった弟が、無縁仏になるのを不憫に思っていた桃経であった。弟思いの桃経の遺言で、扇歌と姉の名が刻まれた墓碑は、扇歌堂の近くに、穏やかに、控えめに残されています。

・わたしだって輝きたい 雑草叫ぶ 智恵子

木造十一面千手観音像

小林幸枝

かすみがうら市中志筑の県指定文化財十一面千手観音像を見てきた。千手観音を見た時、一瞬、銅で作ったのかと思ってしまったが、檜木で彫られた観音像でした。

この像のある観音堂は、もと朝日山滋眼院千手寺と称する真言宗寺院で、須賀神社の別当院でし

た。明治初年に廃寺となり、現在は須賀神社氏子によって管理されています。像は岩形台座に立つ十一面千手観音立像で頭上に十一面の化仏をいた

だき、垂髪、地髪を毛筋彫りとしています。合掌・宝鉢手のほか脇手十九臂をもつ通形の四十二臂像で、天衣・条帛をかけ裙と腰布をまとっています。

像は寄木造ですが、彫眼とし、全体を漆箔(後補)としています。面長の表情や左右対称の腰布の表現、それに穏やかな作風から、鎌倉時代の作った木造金箔塗りで台座四十三センチ、像高一八九センチの立像です。

現在は保護の為に観音堂脇の収蔵庫に移されています。

周囲には立派な大きな古木があり、大変美しい所で、心の癒される所でした。

【風の談話室】

《特別寄稿》

大宇宙と小宇宙

田島早苗

生きると言う事は一体何だろう。余生と言われる日々の営みの中で、まだ知らない事や、腹の立つことに出会い、一喜一憂、中々枯れることが出来ない私は春愁の真つただ中。

謎だらけの宇宙を説明しようと各国の協力により、地球規模のプロジェクトが組まれ、宇宙基地が設定されてから久しいが、何億光年とか、宇宙遊泳とか、不思議な言葉がお馴染みになった今でも、無学の私から見る限り、宇宙の謎は深まるばかりだと思われる。夜空に煌めく星が、宇宙の

ゴミだと言われても、私のお粗末な頭は拒否反応を起こしてしまう。

三十五億年前、地球の海底に命の原型バクテリアが生まれ、海底から噴き出す熱水鉱床の噴泉に含まれる有機物質を吸い込むことで生命を維持、その結果、不要物質を体外に吐き出す代謝機能を進化させ、次々に自分と同じバクテリアを作るように更なる進化が始まった。

次に、バクテリアは、海中に差し込む太陽光の恩恵を受け、光合成により水と二酸化炭素で糖分と言うエネルギーを作り出す。その過程で海中に酸素を放出。

海の水と太陽光の無限のエネルギー源を基に画期的システムを持った生命体が生まれたのが二十七億年前だとか。正に海は人類の母なのだ。

光合成するバクテリアが繁栄するに伴い、益々地球の酸素が増えていった。その酸素を活用して代謝を行うバクテリアが誕生。作り出されるエネルギーは二十倍ちかくなる。こうして地球に動物誕生のドラマが始まったのだと言う。

宇宙のゴミの様な目に見えないバクテリアから人類誕生までの気の遠くなるような歳月に繰り広げられたであろう壮絶なドラマは、凡人には想像すら出来ないけれど、現在でも、人の命の誕生にはそれに負けないドラマが母の胎内で繰り広げられている。

女性の胎内に入り込んだ、肉眼では見えない精子の一個が卵子に辿り着き、生物の進化をなぞるように細胞分裂を繰り返しながら次第に人の姿になって行く。それらは全て遺伝子と脳の共同作業に依り遺漏なく行われ、十月十日（ときとおか）を経て、親の遺伝子を引き継ぐ愛らしい命が誕生する。

産婦人科の診察を受けた際、エコーの胎内映像を見せられた時に受けた衝撃は今でも脳裏に焼き付いている。

人の行動を意識的、或いは無意識の領分でも全て司る脳は、未だ解明されない部分が多く小宇宙とも言われている。

平昌パラリンピックで、全力を出し切って戦った後のアスリート達が見せる、何かを突き抜けたような爽やかな笑顔を見る度、それらの人達の辿ってきた険しい人生に思いを馳せて、胸が熱くなるのは、私だけでは無いだろう。

時を同じくして世間を騒がせている森友学園問題。国有地を破格の安値で売却した時に交わされた文書や、経緯を記した書類が改ざんされたことが明らかになっても『大切な文書を何時誰が、どのように書き替えたのか』『私は全く与かり知らぬ事です』等と、白々しい問答を繰り返す政治家の醜い顔。国会中継を見ていると、日本の恥を海外に曝しているようで、居ても立っても居られなくなる。どうかトカゲのしっぽ切りで終わらぬように祈るばかり。

昔から歴史は勝者の都合の良いように改ざんされ、それがまかり通ってきた日本、弱者は何時

も蚊帳の外、政治家の意識は昔も今も同じなのか。食物の表示方法が変わり、遺伝子組み換えの原料を使用した場合全て表示しなければならなくなるらしいが、遺伝子組み換えの材料を使った食品を食べた場合どのような影響があるのか、私には、全く分からない。花や野菜、果物が改良を重ねて、味や見た目を良くするのは、遺伝子組み換えとは言わないのだろうか。金魚や目高を改良して、より価値の高い品種を生み出すのは、遺伝子の組み換えではないのかしら？

『艱難汝を玉にする』『自分の顔は自分が作る』『氏より育ち』『金剛石も磨かずバ、玉の光は備わらず』昔の人が残した含蓄のある言葉は、親から受けついた遺伝子でも、努力次第で変えることが出来る場合もあると示唆している。パラリンピックアスリート達の爽やかな笑顔を見ながら、このような遺伝子組み換えは大賛成、力のある人の後援を強く願っている無力の私。

大宇宙も小宇宙も、凡人には手の届かぬ謎だけど、何時か誰かが解明してくれるだろう；でもその時、地球は現況を留めているのだろうか？

我が家の小さな花桃が満開で、見る度顔が綻んでしまう。どんなに天候が不順でも、季節を忘れず芽吹き、花を咲かせる植物、そして何時の間にか蠢き出す小さな虫達まで、遺伝子に操られているのだろうか。四季折々の美しい大自然界に恵まれた日本に住む幸せを何時までもと願わずにいられない。

そして、最後は「余生を精一杯生きた！」と思えるよう頑張りたいと願っている。

春愁や猫と話して一ト日終ふ

“ふるさと風”誌が五月号で十二年を迎え、その間会員の皆様は一回も休まず投稿されたという事は、なんと素晴らしいことでしょう。何時までも地方の歴史を作り続けて下さい。

一度だけの人生を、全力で生きている皆さんに拍手喝采を送ります。

怠惰な私ですが今後とも宜しくお願い致します。

■なぜか、今年の冬は寒さがきびしい■

●ランチコンサート

寒さが行ったり来たり、月1回のジャズライブに行った。いつものメンバーとお客さん「今月も元気で会えて良かったね」と、一番元気なおばちゃんは今インフルエンザで休みだった。スタンダードジャズから映画音楽、懐かしの童謡、ラテン、ボサノバなど、演奏を聴きながら美味しいランチを。窓の外を見ると、いろいろな野鳥が代わる代わるこちらを覗いていた。今日はカフェオリーブさんでのライブ、雨の日も・風の日もお客さんが集まります。お互いの体を労わり合って、ランチをしながら2時間あまりの生演奏を楽しみ、また来月まで元気で頑張ろうねと、そして別れる。

コンサートがない別の日、お隣さんから「明日は雪が降るよ」と知らせてくれたが、雪は降らず小雨模様だった。空は何時までもどんよりしていて、こういう日は気持ちも鬱々と、野暮用を済ませながら、馴染みの喫茶店にコーヒーを飲み、cafeのテラスにはクリスマスローズの花が咲いて居り、ジョウビタキがこちらの様子を伺っていた。

●甘い香りにさそわれて

朝日トンネルに近い辻のいちご団地へ。いちごは、寒さが厳しい今が美味しい時期です。ハウスの中で大切に育てられたいちごが朝早くから摘みとられ、販売所に集められパック詰めされます。これらの作業を老夫婦2人だけでやっていますが、多くの友人達が入れ替わり手伝いに来てくれると

います。先日機会があり、このパック詰めを初体験しました。また来てくださいとの言葉に誘われて、お手伝いに出掛けました。

艶々したいちご「いばらキッス」9時頃には遠くから来たお客さんが「この前食べて美味しかった」とか、「昼頃来たら売り切れだったので」とか、多くのお客さんたちがひっきりなしに。

お昼は、手作りの混ぜご飯を頂き、デザートはいちごの食べ放題。次回のお手伝いは、いちごの摘み取りかな。テレビからは羽生、宇野選手の素晴らしい演技が流れていた、思わずみんなでウル。

その後も家族連れが次々とやって来て、いちご狩りがしたいと。明日バスツアーが2台入るのでいちご狩りの方は断った。残念そうに帰って行くお客さんに申し訳ないと思うが、仕方がない。それにしてもいばらキッスの人気のあること。お隣の直売所では、白いイチゴが売られていた。少しさっぱりした味だった。ご主人と奥さんは、私もあと10年若かったらなあとしみじみ語っていた。

●八郷を巡る

桜の便りもチラホラ、日中は暖かく、こんな日は心もウキウキ。イチゴ団地に遊びに行きお昼を頂いて、知人のバイト先の直売所でまたまたお赤飯などを頂き(月1度のお客様サービスデー)、最後は狐塚に建つこんこんギャラリーで狐の焼き物に囲まれて、狐にまつわる民話の世界を楽しんだ。

小松菜、この時期、窓辺が寂しい。使った野菜の根元を水に浸けて置いたらどうだろうと思ってお皿に浸けた。1日毎に少しずつ葉を伸ばし4日目青々とした葉っぱになった。シクラメンは4ヶ月

も花を咲かせている。みんなたくましいなあ。

切り花を頂いた。沢山あったので、仏壇とリビングとに飾った。大きなダリアやスイートピーに励まされ、確定申告の為の医療費などの整理をした。それにしても医療費のすごいこと、特に昨年は私の骨折の2回にわたる手術、2人の歯医者通いが加わり領収書を揃えるだけで頭が混乱。合計額にまたまたびっくり！

最近彼方此方で、地域おこし協力隊の活動を耳にする。ここ石岡市でも4名の新卒者を採用した事を知った。この4人が開催する、朝日里山学校のウリボー食堂というイベントを知り友人と参加した。八郷で採れた食材を参加者みんなで料理、メニューはそばサラダ、弓豚のトン汁、野菜のドレッシング、バターナッツかぼちゃのプリン、イチゴのほうじ茶など。今回は夏野菜の時期予定、今後の協力隊の活動も楽しみです。

●女だけの4人旅

昨年の夏、連れ合いを亡くした姉に元気が無い。姪(姉の娘)から気分転換にと、旅行を誘われた。姉の孫(大学生)の休みに合わせて、2泊3日で京都旅行の予定を立ててくれた。果たしてどんな旅になるやら、不安と楽しみの半々、新幹線のチケットが送られてきて、気分は早くも京都へ。夫は予定が立て込んでいて、姪の娘から貰ったサンリオのグッズ(ぷりんちゃん)と留守番です。

・1日目

姉、姪、姪の娘そして私の4人旅・・・昼頃京都駅に着き、荷物は駅の宅急便で、ホテルに届けて貰う。早速昼食を済ませ、乗り放題のバス券を買う(900円)。まず伏見稲荷へ、ここは日本かと思っ

多かった。着物姿も多く、周りには貸し着物の店が何件もあった。大鳥居をくぐると圧倒されるほどの鳥居が続き、人混みをかき分け歩く、京都では外人さんには一番人気だとか。そのあと清水寺に行ったが、清水の舞台は工事中だった。階段の両脇に並ぶ土産物などを覗きながら、甘味処でぜんざいを食べる、早めにホテルに入り明日に備えた。

・2日目

早朝一人で高台寺へ、秀吉とねねを祀ったお寺です。400年以上前の時代を感じながら境内を歩き、2時間程してホテルに戻ると姪の娘は着物に着替えていた。4人揃って嵐山から嵯峨野の方へ、数か所の寺を巡りながら、のんびりと、お抹茶などを頂きながら歩いた。ホテルに戻ったのは薄暗くなってからだった。流石に足はパンパンに張っていた。

・3日目

京都で何故か水族館。姪母娘はサンリオピューロランドに通い詰め、中でもシナモンが大好き。丁度水族館とシナモロールのコラボが開催中、シナモロールとミズクラゲが星空を舞うようにダンスをする映像や音の演出など、ふわふわファンタジーの不思議な世界、いつの間にかフワフワの世界に引き込まれていた。昼食はネットで調べていたレストランへ、なんとそこはシナモロールカフェ、さすが私と姉は別のレストランへ行った。あつと言う間に時間が経ち、帰路に夜9時無事家に着いた。

●八郷の日々

・山酔会

月1回の集まり、参加したい人が参加して、夕食

を共におしゃべりをする。場所はひとつの郷。年に数回は私も参加、昨夜は常連さん3人はインフルエンザで休みだったが、久し振りの方たちとしやぶしやぶを共に。

オーナーのママは針仕事も得意、今回作務衣を縫って貰うことにした。義兄の形見のアンサンブル、体の大きい夫は着られない。ほどこいて、洗って持って行つた。暫く縫ってないと言いつつながら、寸法をとってくれた。ママはかなりの年齢ながら、いまだにダイビングで彼方此方の海に、その行動力はすごい。

・雪

昨日、未明から降り始めた雪、うつすらと辺りが白く。外を見た夫は、またかあと云った。チャリティーゴルフ大会の日で先月の予定の日は大雪中止だった。心配しながら早朝出かけて行つた。雪は降ったりやんだり、地面に積もる事も無く一日続いた。ゴルフは中止すること無く決行し夕方帰って来た。帰って早々、寒かった！と。私は午前中は来客があつたが、午後は誰にじやまされる事なくDVD鑑賞できた。

●コンサートに

昨夜3日間の京都旅行から無事帰り、今日は宮下祥子さんのギターコンサートに東京まで。新橋で友人と待ち合わせ久し振りに生音を堪能した。友人、誘ってくれてありがとう。彼女の姉さん、来週大きな手術を控えている。そんな時こんなきれいな音色に触れられ、なんか、元気になったような気がしたよと、その昔ギター館のイベント時に度々川崎から手伝いに来てくれ、夜中まで掃除など手伝ってくれた姉妹、姉さんの手術上手いままですよ。コンサートには久し振りの方も大

勢、宮下さんともお話が出来て嬉しかった。

●再び八郷の日々

・竹の魅力

今日は竹細工の日、師匠の竹を割る作業を見ながら、改めて先日行つた京都を想い出した。嵐山の嵯峨野に広がる竹林の小道。小道の横丁や、寺に通じる道、民家の塀、ごみ箱まで竹を使っている。普段は見過ごしていた竹も今回はやたら目に付いた。

・味噌作り

先日、味噌仕込み終わりました。今までは大豆を煮て仕込んでいたのですが、今回は蒸籠で蒸して作るグループに入れて貰いました。蒸された大豆を潰し塩と麹と混ぜて保存容器に、みんなで美味しくなあれ、と、いいながら味噌玉を作って容器に投げる。みんなでやると仕込みも早い。終わった後タケノコご飯を頂いた、初物美味しかった。季節はドンドン春に向かって。

・畑一面

昨日、未明の嵐、嵐の過ぎ去った後、買い物に行くときスーパーカスミの駐車場は湖の様だった。所々道路には土砂が流れていた。そして、我が家の隣の畑、一面の花畑になっていた。遠くから見るとまるでラベンダー畑の様、植物はすっかり水分を吸って生き生きと、我々は雑草との戦いが始まる。春本番の暖かさ、我が家の隣の柿畑は猫たちの楽園になる。陽だまりに彼方此方、猫たちがひなたぼっこ。時に走り回り、じゃれあい。コロちゃんはお堀の上からうらやましげに見ている。いったい何匹いるのやら。

・ぽかぽか陽気

暖かさにつられ外に出ると、やたら、気になる

所だらけ。雑草にまぎれ水仙、クロッカス、クリスマスローズやらが花を咲かせている。昨年話題になったナガミヒナゲシもあらゆるところにべったりと、オレンジの花のあまりの綺麗さに放置したのが祟ってしまった。それらに目をつぶって石岡そだちに、お彼岸用の花が沢山並びお客さんが次々と、石岡市内の方はお彼岸、お盆にはお花を沢山買う、知り合い、ご近所さんにお花を持ってお参りする。1件で「東と東と、我が家の方ではそういう習慣はない。この時期はお店も賑わっているが、今月いっぱい閉店するという。頑張ったのに残念です！」

《風の呟き》

ツエッペリン記念碑

打田昇三

昭和五十八年だと思うが現役時代の或る日に私は土浦市役所からの電話を受けた。「…何かの用件で土浦に来たドイツ大使館の一等書記官が「ツエッペリン号の降りた場所を見学したい」と言われて、そちらに向かう…」と言う内容である。

其の場所は戦時中に米軍の空襲で焼かれた日本海軍航空隊の基地跡だが、昭和四年には世界一周を目指し米国のレーク・ハーストを出発した独逸の大飛行船「ツエッペリン伯爵号」がシベリア大陸を横断して東京上空を飛び、八月十九日に土浦へ飛来して収容された大格納庫の跡地でもある。其の一角に私たち足軽階層が文句を言いながら土木作業をさせられて完成した「日独友好濫觴（らんしょう）之地」の記念碑が建てられていた。

大使館の一等書記官がどの様な地位なのかは知らないが宝籤でも一等はごく少ないから偉い人に

は違いない…と思い、私は上司の総務課長に報告し関連部署に連絡をしてから念の為に記念碑の在る地域への出入り口付近を見に行った。其処は土浦市内く荒川沖へ通じる県道と旧海軍時代の鉄道引き込み線を挟んで東側になる。ゴミなどが落ちていないか、怪しい者は居ないか…周囲を見渡すと、知らされた時間より未だ三十分も早いのに、ライトを点けた県警のパトカー数台に先導されて車列が土浦方面から行進して来るではないか…慌てて警衛所に駆け込み「警備課と広報へ知らせるように！」指示をしたのだが、同時に「県道で大使館の偉い人を待たせるわけにはいかないであろう（パトカーが一緒なので警察には怒られないと思うが…）」と私は判断をした。

階級社会であるから本来は何事も上司の指示を受けるべきなのだが時間が無い。私は身分を顧みず県道に飛び出して、独断で基地内に車列を誘導してから先頭のパトカーに居た警察官に「広報担当者のご案内に参ります。申し訳ありませんが此処で少しお待ちください…」と言った。間も無く広報担当幹部が来たので助かった記憶がある。

世界最大と言われたツエッペリン号は無計画で日本に飛来したのでは無く、米国から西周りで地球一周を企図して先ず大西洋を横断するドイツ迄の第一コースから、西シベリアを経て東京経由で霞ヶ浦に着く第二コースを無事に飛んで土浦（現在の土浦市右衛門町）に着陸したので、十日後の八月二十九日には目的地の米大陸へ向かい総飛行日数二十二日弱での「最短世界一周」を記録したと言う。当時の日本でも話題となり各地からの見学者が土浦に殺到したらしく、私が生まれる前だが両親も東京から見学に来たと聞いている。

此の年の四月十八日には、日本陸軍の航空界で

先達と言われた小関敏三と言う少佐が各務原での飛行訓練中に墜落死されているから、人間が空を飛ぶ…ということが未だ平常化していない時代なので人を乗せ荷物を運ぶ巨大な風船は世界の人々を驚嘆させたことと思う。しかし、ガスを使った風船の様なものであるから爆発の危険が伴う。飛行船時代は短かく、航空機時代になった。

ジェット機時代の今では空飛ぶ牛のような飛行船は見向きもされないとと思うが飛行機が出現する迄の航空輸送手段として珍重された時期もあったらしい。それにしてもツエッペリン号のことなど誰も覚えていないであろう現代に大使館の高官が着陸地視察に来るとは…ドイツ人は違う！記念碑を造って置いて良かったと今は思っている。

上杉禅秀の乱

打田昇三

石岡は大国・常陸の国府が置かれた都市なので、近辺に争乱があれば先ず巻き込まれる。ところが室町時代の應永二十三年（西暦一四六六年）に起きた「上杉禅秀（氏憲）の乱」は発端が石岡でも合戦は鎌倉辺りで行われたから、石岡地方は平穏無事であった…と言う珍しい事件である。

その頃、室町幕府は足利尊氏の長男・義詮の系統が京都で將軍職を継いで公方（くぼう）と呼ばれており、武士団の多い関東には將軍の兄弟・親族が「関東管領（かんとくあんれい）」として置かれていた。当時の関東管領は足利尊氏の次男・基氏から四代目の持氏で名譽欲が強い。全国支配の將軍に比べて関東管領の權威は東国にしか及ばないから不満も出る。勝手に「鎌倉公方」と呼ばせて京都に対抗したが満足出来ない。上司にしたいくないよ

うな人物・足利持氏に仕えて石岡市小幡近辺を領有する越幡六郎と言う武士が居た。

ストレスが溜まったのか体調を崩した越幡は、環境が良い小幡で療養しようと休職願を出して領地に戻って来た。ところが是を妬んで足利持氏に「越幡六郎は仮病」と告げ口をする者が居たらしく、怒った持氏は調べもせず突然に越幡を懲戒処分とし其の領地を没収したのである。

是に反対して事の真偽を糾す様に諫めたのが関東管領の執事・稲佐俊である上杉氏憲であり、当時は仏門に入って禅秀と名乗っていた。しかし意見をされても日頃から禅秀のことを疎ましく思っていた公方・持氏は聞く耳を持たない。

「道理に外れた主君を諫められなければ、執事の任務は果たせない」：禅秀は辞表を提出した。この様な場合には慰留するのが当時の慣例なのだが是を自分への面当てと解釈した持氏は、怒って辞表を筆を取るように受理し、禅秀のライバルであった人物を直ちに後任に据えた。

「上杉氏」は丹波国上杉荘に土着した藤原一族であり氏祖・重房の孫娘（清子）が足利尊氏を生んだことから室町幕府に重きをなして、清子の兄や甥たちが鎌倉近辺に土着し扇谷、詫間、犬懸、山内各流に分かれたが是も勢力争いを繰り返していたらしい。余計なことだが川中島合戦の上杉謙信は上杉姓を継承しただけで別系である。

関東の管領と執事が不仲になった：噂は京都に聞こえ、先ず是に反応したのが將軍・義持の弟で將軍になれず居候暮らしをしていた義嗣である。

一方、鎌倉にも役職に就けなかった持氏の伯父・満隆が居たので早速、信頼できる僧侶を介して倒幕運動の相談をした。満隆は野心家だが大事を決定する勇気が無い。其処で有名な？石岡近辺で起

きた越幡六郎事件の被害者とも言える禅秀たちに話を持ち込んで仲間に誘った。

その結果、禅秀の一族・親類筋を始めとして千葉、埼玉、神奈川、栃木、群馬、山梨から東北の一部に居た武士団と、茨城の佐竹・小田などが加わり予想外の勢力になった。ところが当時、幕府から処罰を受け謹慎していた近江の有力武将・佐々木六角を勧誘したところ、佐々木は謀反計画に加わらず逆に將軍に密告した為に折角のクーデター計画もバレーで合戦となり、首謀者の上杉禅秀一族は自滅に追い込まれた。仲間に加わった多くの武士団が処罰されたのは言うまでも無い。

此の事件の余話として地元へ伝えられた代表的な話が「小栗判官と照手姫」だと言う。クーデターは失敗したが面白い話が茨城に残った。

サムライアリの怪

菅原茂美

人生も傘寿を超すと、「人間とは何か？」と改めて問い直したくなる。毎日飛び込むニュースに、微笑ましいものは稀で、あちらでは、それ戦争だ、テロだ。こちらでは殺人だ、詐欺だと耳を塞ぎたくなるような話題ばかり。人間とは、このように醜い生き物なのか：とガックリ。

人間の裏面ばかり見ているとそういう事になるが、芸術やスポーツなど、心躍る面も多少はある。しかし両者を天秤にかければ、マイナス面が大きく、人類は高貴な進化などしていない。

さて高等霊長類と言われながら、人類は穏健な理想的行動などしていない。なぜにこうも平穩から縁遠いのか。極楽浄土を夢見た奥州平泉文明は、猜疑心の強い頼朝により、破壊されてしまった。

権力者にとって「己の利益」にならないければ、他国の浄土など、許せぬ存在なのか？

そう考えると、現時点の人類の醜い行動は、高次元の聖者からは、ほど遠く、本能丸出しの、未熟な現在進行形なのかもしれない。

人間も単なる動物の一種に過ぎない。飛びぬけて神聖でも、高貴でもない。どれだけ進化しようが、己と種の命を永續させようとする利己的な遺伝子に、強く縛られている。ならば野生生物は、種の保存のため、どのような戦略を取り入れているのか？：

日頃、「郭公」の托卵行動には、腹が立つ。自分の子ぐらい自分で育てろ！他人の巣に卵を産み、先に孵化し、後から生まれる本来の子を巣から突き落として殺し、その子に成りすまして育ててもらい、生き抜くなど、どんな事情（*1）があるにしろ許せぬ行動である。人類の醜態に勝るとも劣らぬ進化のいたずら。

【*1】郭公は体温が不安定らしい。それでは安全な孵化ができない。それゆえ体温安定のヨシキリ・ホオジロなどに托卵するといわれる。】

更に自然界には、並び劣らぬ悪党がいる。主題の「サムライアリ」である。このアリは日本を含む北半球どこにでもいる。この悪党の女王はクロヤマアリなどの巣を攻撃して乗っ取り、相手の働きアリを「奴隷」にし、自分や自分の卵や蛹（さなぎ）の面倒を看させる。

サムライアリの女王は、近親交配を避けるため、近隣に同種の巣があればその雄と結婚飛行をする。交尾後、単身でクロヤマアリの巣に乗り込み、クロヤマアリの女王を噛み殺し、その体液を自分の体に塗り付け、クロヤマアリの女王に成りすまして、働きアリに自分の面倒を看させる。クロヤ

マアリの巣房が空けば、そこに自分の卵を産み付け、奴隷たちに卵の面倒を見させ、全く自分のファミリーに置き換える。

植物でもヤブカラシは、自分の立ち上がり到手を貸してくれた周りの草木の上にはびこり、恩人を枯らしてまでも太陽光を独占し繁茂する。

人類はいくら威張ってみても、利己的行動第一主義で、所詮は野生動物と大した変わりなし。わずか700万年ぐらいで、翌檜(あすなろ)が真の檜(ひのき)になれるはずもない。サルと別れたばかりの人類に、神聖さを求めるのは、所詮無理な話。進化は突然変異で起こるが、理想的変身は稀。闘争ばかりの人類が、神様の課長補佐に出世するのは、数百万年早過ぎる。

【特別企画】

打田升三の私本・平家物語

巻第八、(一・一)

「逃げるが勝ち」と言う諺があるが、時と場合によるらしく逃げ方によっては勝てない。つまり逃げ方にも上手下手が作用する。寿永二年七月二十五日に一族総出で都を落ちて行った平家などは「下手な逃げ方」の見本のようなものであり結局は再び都に返り咲く事も無く滅亡する。一方で、その前日に平家に知られないように京都を脱出した後白河法皇は逃げ方の上手なお方である。

「平家物語」も表題を変えたほうが良いように平家の影が薄くなり、代わって源氏系の登場場面が多くなってくるのだが、平家が夜逃げをした京都に先ず進駐してきたのは、それまで全く知られ

て居なかった木曾義仲である。社会が複雑化している現代ならば、いわゆる「発屋」が成功することが有るけれども、権威や肩書が幅を効かしていた平安時代には如何に実力が有ろうとも先ず評価の対象になるのは家格とか家柄とか、或いは先祖の功績とか虚飾的な事項が多かったようであるから木曾の山中に起こって瞬く間に平家を追い落としてしまった無名の武将「木曾義仲」も改めて天皇又は上皇もしくは法皇から政党の公認証書のようなものを貰わないと英雄にはなれないのである。

木曾義仲は都へ都へと軍を進め、結果として安德天皇込みで平家を追い払ったけれども、いわゆる権謀術数(けんぼうじゆつすう)を知らない。気の毒ではあるが魍魎魍魎(ちみもりよう)の世界に似た権力の頂点に立てる人物ではない。

一方で「逃げの達人」のような後白河法皇は、落ち延びる平家を上手くかわして都に残ることに成功し、思いも掛けず平氏系以外の天皇を選ぶ権限を手に入れてしまった。此処で法皇の許に木曾義仲らが平伏すれば問題は無いのであろうけれども義仲が周りを見回したところ武力の頂点に居るのが自分であるから「俺が將軍様だ！」と錯覚してしまった。そこで木曾義仲を見限った法皇は鎌倉に居る源頼朝を利用することを思い付く。

木曾義仲の活躍に気を揉んでいた源頼朝は法皇の働きかけに応じる条件として自らの支配圏を強化し東国を源氏の勢力下に置くことに成功した。

平家物語の巻八は、木曾義仲に追われて西国に落ちて行った平家一族の苦勞と反撃、さらには待望の征夷大將軍を手中にした源頼朝の野心などが入り混じって、源平両軍の激戦が展開される巻第九に繋がって行く。それにしても源氏同士の争いに比べて平家一門は負けても逃げても仲良く？結

束しているのが素晴らしい。その力を上手く纏めれば滅びることも無かったのでは？とも思うが、何事も都合良くは行かないのが世の中である。

山門御幸(さんもんこう)のこと

会社が倒産して夜逃げをするのに失敗も成功も無いが平家は都落ちに後白河法皇を連れて行け無かった―是は誰が考えても致命的なミスである。

この人物(鳥羽帝の第四皇子・雅仁親王)は「天皇の器(う)つむにあらざ」と言われながら短期間でも皇位に就き、其の後、三十数年に亘り院政を布いたのである。偉大な人物を侮ったことになる平家は、安德天皇を擁しながら一夜にして国賊にされてしまった。

寿永二年七月二十四日に京都を捨てて西国に落ちて行く決定をした平家が大義名分を保持する為には後白河法皇を連れて行かねばならない。明け方に法皇を迎えに行ったのだが、その寸前に怪しい気配を察した法皇は、側近である宇多源氏の右馬頭(うまのかみ)馬寮(ばりょう)の長(ちやう)資時(すけとき)だけを供に、御所を脱出して鞍馬に隠れた。資時の父親は按察大納言(あぜちのだいなごん)監察職務を兼ねる大納言(だいなごん)資方(すけかた)と言う公家である。

法皇に頼られた鞍馬の僧たちは「此処は京都市街地に近いから、油断はできません！」と言うので更に比叡山横川に在る峯や鞍馬の奥に通じる難路を抜けて奥深い場所の宿坊に匿って貰った。是を知った僧兵たちが「それならばどうぞ東塔へ御出で下さい」と東塔の南谷に在る円融房に案内をして、其処を御所にされたのである。その為に比叡山の僧兵も武士も円融房の周囲を厳重に警戒す

ることになった。平家は逃げて行ったのであるから、心配は無いと思うのだが…。

その様な次第で法皇は御所を出て比叡山に隠れ天皇は平家に連れられ宮殿を脱出して西の海へ逃れたのだが、是を真似て摂政も戦火を避けるつもりで吉野の奥に潜み、八条院など女院や宮様方は洛南の八幡、洛北の賀茂、洛西の嵯峨・太秦（うずまさ）・西山、洛東の東山に疎開した。避難するのは自由だが逃げ隠れたのは其れまで国政に関わっていた連中であるから、無責任極まりない。

平家が落ち延びて、源氏は未だ進駐して来ない。京都には庶民だけが取り残されて主（指導者）の居ない都になってしまった。日本国が営業を開始してからはまだ其の様なことは一度も無かったと思われる。かつて、聖徳太子が書き残したと言う「未来記」に現在の事がどの様に書かれているか見たいものである——と、当時の人は思った。

さて、平家が天皇を連れて夜逃げをし、後白河法皇が法皇らしく寺院に隠れて居ることが分かれると目先の効く公家どもは先を争うようにして比叡山に押し掛けた。その顔ぶれは松殿と呼ばれた前関白の藤原基房、当殿と呼ばれた摂政関白の近衛基通、左大臣の藤原経宗、右大臣の九条兼実、内大臣の藤原実定以下、大納言、中納言、参議及び三位から五位までの殿上人と呼ばれる者たちであるが、更には少しでも領地を持つて居る者や官職に就いて居る者たちも、其れ迄は平家一門に独占されていた出世街道に障害物が無くなった！とばかりに後白河法皇の許に集まって来た。比叡山の円融房（法皇の仮御所）は、堂の上から堂の下、門内、門外はもとより付近一帯に請願者が満ち満ちて、比叡山の大繁盛は天台座主を喜ばせた。

同月二十八日には後白河法皇が自分の屋敷に戻

ることになり、木曾義仲が五万余騎の軍勢で行列を守護した。近江源氏の山本冠者義高（源頼光の子孫）が源氏の旗印である「白旗」を立てて行列の先陣に加わった。思えば平治の乱に源氏が敗れてから此の二十余年間、ついぞ見た事が無かった白旗が都に進んできたのである。都の人々は是を珍しく思つて眺めていた。

木曾方に付いていた新宮十郎藏人行家も宇治橋を渡つて都に入り、足利氏の祖に当る陸奥新判官義康の子・矢田判官代義清も大江山を経由して上洛して来た。平家時代は静かにしていた大阪近辺の源氏系武士も群れを成して都に殺到し、昨日までは探しても居なかつた源氏軍勢が都に溢れた。

平家が居なくなつて必然的に権威が戻つた朝廷と言ふか後白河法皇の臨時政府は、取り敢えず勸解由小路中納言経房（かでのこうじちゅうなこんつねふさ）
——藤原北家、当時は参議、左大弁——太政官の高官——と検非違使別当左衛門督実家（けいひしのべつとうさえもんのかみさね）
——いへ——検事総長兼衛門府の長官、近衛天皇皇后・多子の実弟——とが法皇御所の廊下に出て木曾義仲と新宮十郎行家を呼び寄せた。木曾義仲は赤地錦、唐綾威（からあやどし）
——中国伝来の優美な縷の鎧を身に着け、金銀で装飾した強そうな太刀に、格調高い弓矢を帯び兜を脱いでいた。十郎行家は紺地に緋色で編んだ鎧を着て黄金造りの太刀を持ち、白地に中を黒く染めた矢を負い、黒漆で塗り込めた弓を持ち義仲と並んで兜を脱ぎ、跪いていた。後白河法皇は直接に姿を見せていないが陰に隠れて二人の源氏を鑑定していたと思う。

やがて朝廷側から源氏の二人に「前内大臣・平宗盛以下の平家を追討するように」命令が出た。平家は、黙つて逃げて行つた上に丁寧（ていねい）に京都に火を放つたから一夜にして国賊にされても仕方（しかた）がな

いが、権威というものは実に儂（なま）い。

儀式慣れした武士ならば形だけでも有難（ありがた）がつて命令を受けるのだが木曾義仲は天皇の権威を知らないから、就職先の社長にでも言うように先ず、「京都（きょうと）は初めて泊まる所が無い！」と言つた。

そこで木曾義仲には後白河法皇近臣の大膳大夫平成忠（別系平氏）が宿所としていた六条西洞院が、また十郎藏人には法皇が御所としていた法住寺殿の付属施設である南殿（葺の施設）が与えられることになった。是により久し振りに源氏武将の屋敷が京都に出現したのである。

後白河法皇は、当代の天皇（安徳天皇）が平家の手中に在り、西海の浪に漂流している事態を重く見て平家側に対し「天皇と三種の神器を返還するよう」公式に申し入れた。然し、それを返してしまつては只の逃亡者に成り下がつてしまふ平家が「分かりました」と言う筈がない。冷静に考えると、是は君主国家の基幹に関わる重要案件であるから深刻に判断しなければならぬのだが「天皇の器に有らず」と言われた後白河法皇は、失礼な言い方で申し訳ないが江戸時代の長屋の住人と同じで決断と実行が早い。「平家が返さないなら別な天皇を立てれば良い！三種の神器などは専門の職人に任せれば何とかなる…」と考えた。

その頃、高倉天皇の皇子（遺児）は平家に守られた安徳天皇の他に三人居て、そのうち安徳天皇の次弟も平家に連行されていたから京都にはナンバ一三四が残つていた。そこで寿永二年八月五日に、後白河法皇が疎遠であつた二人の幼児を呼んで、どちらかを天皇にする審査会が開かれた。面接（めんせつ）だけで決めることにしたから保育所の入所テストのようなものである。

最初に呼ばれた五歳の子は正直な子であつたか

ら恐れ法皇の顔を見た瞬間に泣きだした。法皇は頭に来て現代の言葉で言えば「もういい、さっさと出て行け！」と怒鳴った。次に呼ばれた子は未だ三歳で「怖い祖父」を見抜く力が無い。ニコニコ笑って言われるままに法皇の傍に寄りお菓子でも貰おうと膝の上に乗った。法皇は感激して「誠に血縁の無い者が自分のような老人を見て懐くことは無いであろう。顔立ちも高倉天皇の幼い頃に似ている。この様な忘れ形見が居ることを知らなかった」と涙ぐんでいた。

巻第七「主上都落」で平家が逃げる前に法皇を迎えに行った場面が出て来た丹後局こと浄土寺の二位（法皇の寵妃・後に源頼朝も一目置いたが「さて、お譲り（安徳天皇に替わる即位）は此の宮しか無いでしょう」と言ったので、法皇も納得したように「当然であろう」と言われた。念の為に占いをしてみたが「四の宮（法皇の膝に乗った子）が天皇の位に就かれれば子孫孫までも日本国の主で居られるでしょう」とする神託が出た。

第八十二代・後鳥羽天皇となった此の坊やは後に鎌倉幕府執権の北条氏と争って敗れ、遠く隠岐の島に流されて終わる。神託も当てにならない。

其れは兎も角、後白河法皇に気に入られた坊やの母親は七条修理大夫（ちじじょうのしゆりのだいぶ）と呼ばれた藤原信隆の娘である。平家に連行された建礼門院（平徳子）が中宮（第二皇后）であった頃に仕えていて高倉天皇に氣に居られ何人かの子を生んだ。父親の信隆には多くの女兒が居たから何としても女御（にょご）皇后、中宮に次ぐ天皇妃或いは皇后を出したいものと願っていた。或る者が「白い鶏を千羽ほど飼育すれば、其の家には必ず皇后が出る！ということがあるそうだ」と言うのを聞いて、其の通りにしていた。

鶏が関係するかどうかは知らないが此の女性は高倉天皇の子を産むことが出来たけれども、平家全盛時代であるから平家と中宮とを憚り公然と発表することも出来ずにいたのである。それを清盛夫人の時子が知って「遠慮することは無い。私が育てて天皇の候補にしよう」と乳母や大勢の女官を付け守り育てていた。

その中でも高倉天皇の四番目の子になる若君は清盛夫人と関わりの深い法勝寺の高僧・能因法印が付き人に当てられていた。この法印が平家と行動を共にする際に、慌てていたので自分の妻（藤原範兼の娘）らを連れずに逃げてしまった。能因が途中から使いを寄こして「女房（鶏の世話になった女性）らを連れて使の者と共に来るように」と言ってきた。

そこで能因の妻が喜び、若君らを連れて平家の後を追おうとした。屋敷を抜け出して西七条まで来た時に、能因夫人の兄である紀伊守・藤原教光が行く手を塞いで「そなたは氣が狂ったのか！良く考えてみなさい。平家と縁が切れたのは此の若君（四の宮）の御運が開けたことになるのですぞ！」と言ひ西国へ行くのを止めた。

能因夫人は仕方なく屋敷に戻ったのであるが、果たして翌日には後白河法皇からの迎えが来た。是は其の様になる運命では有るが、四の宮には紀伊守教光が何よりも功績があった人物である。

ところが、後鳥羽天皇となった四の宮は恩人である藤原教光のことを全く顧みようとしなかった。教光は思い余って宮殿内に次のような二首の歌を書いて張り紙をした。

「一声は思い出で鳴けほととぎす」

おいその森の夜半の昔を」

「籠（こ）の中もなほ羨まし山がらの

身のほど隠す夕顔の宿」

後鳥羽天皇は、さすがに此の歌を見て良心が咎め、「ああ、気の毒なことをした。未だ健在であったのか：今まで気付かずになっていたのが迂闊であった」と、慌てて藤原教光を正三位に叙されたのである。ただし実際に教光が叙勲されたのは土御門天皇の建仁二年（後鳥羽院政時代らしいから、全く忘れられていたことになる）。

先に述べたように後鳥羽天皇（上皇）は、やがて鎌倉幕府（北条氏）と対立し承久の乱で隠岐の島に流され其処で没する。藤原教光の肩を持つ訳ではないが恩人を粗末にした報いかも…。

（続く）

（お知らせ）

2006年六月にふるさとルネサンスの会会報としてスタートした、当会報も、来月の五月号をもって満十二年となりました。ちょうど干支が一回りです。

満十二年を記念して、来月号は拡大記念号を発行します。ご期待ください。ふるさと風の会十二周年記念祭のご案内は、織り込みチラシにご案内しております。

今後とも変わらぬ応援を宜しくお願い申し上げます。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>